

氏名	吹田 映子
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	博乙第 2859 号
学位授与年月日	平成 30年 3月 23日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	ルネ・マグリットの絵画表現における「光と闇」の主題研究

主査	筑波大学 教授	博士（文学）	山口恵里子
副査	筑波大学 教授	博士（文学）	濱田 真
副査	筑波大学 教授	博士（哲学）	廣瀬 浩司
副査	筑波大学 特命教授	博士（芸術学）	五十殿利治

論文の要旨

本論文は、ベルギーの画家ルネ・マグリット（1898-1967）が人間の根本的な問題として設定した「光と闇」という主題を、自身の絵画作品でいかに追究し、その主題がいかなる表現を生んだのかを、1920年代から1960年までの作例を詳細に検討することによって明らかにすることを目的とする。先行研究では、マグリットは、シュルレアリスムの代表的な画家としてみなされ、「デペイズマン」や「対象の不可思議な組み合わせ」といったシュルレアリスム美術の特徴を備えた作品を描いた画家であり、内面や「目に見えないもの」の表現には否定的だったとする評価がなされてきた。こうした従来の見方に対して本論文は、マグリットの作品を内在的視点から考察し、彼の創作を動機づけたのは「光と闇」をめぐる問題であったと主張した。マグリットは、同時代の芸術家との交流や時代状況を濃厚に反映させつつ、「光と闇」を絵画上に表現する作品を創造し、またその試みを言語化した。本論文は、そのようなマグリットの試みを彼の絵画・言語表現に追跡し、「光と闇」の主題が、彼の精神世界のみならず彼を取り巻く外的な状況と深く結びれていたことを明らかにし、「光と闇」の主題が、見えるものと見えないもの、生と死、太陽と墓、精神世界と精神外世界といった問題と関連しながら展開されることを解析した。

本論文は全8章から構成され、1920年代から1960年代までのマグリットの絵画作品を年代順に考察した。第1章は、マグリットの画業の出発点とみなされる《迷子の競馬騎手》（1926年）とその4点のヴァリエントを比較し、さらにジョルジュ・デ・キリコの作品の影響を検証することによって、誇張された線遠近法や明暗の反転した空、白と黒による対比といった表現を生み出した過程を詳らかにした。上記の作品でマグリットが主題化したのは、日常の秩序とは異なる、生と死、光と闇、時間と非時間が逆転する「さかさま」の世界であり、マグリットはこの世界の中において「光と闇」「生と死」を逆転させることにより現実の時空間を問い、ひいては「時間」を否定した。

第2章は、1920年代末にマグリットが、ポール・ヌジェが論じた「孤立」論を自身の絵画表現に援用した作例について考察した。「孤立」は、ある対象から日常的な文脈を作為的に切り離すことによって、その対象

に予想外の魅力を与える手法である。「孤立」した対象を描出することは、その対象を「見る」行為を問いつつ、「見えるもの」と「見えないもの」の関係を究明することにもなった。マグリットは、額縁や色帯といった枠組みを多用して「孤立」を表現し、その関係性と「光と闇」の問題を接続した。さかさまの世界を創り出していた「光と闇」は、「見えるもの」と「見えないもの」、内部と外部という対立したイメージの中で捉えられるようになる。

第3章は、1932年に制作した《親和力》と《予期せぬ答え》から始まる、矛盾する二つの対象を組み合わせた「弁証法的」イメージの創作に焦点を当てた。前者に描かれた鳥籠の中の白い卵と、後者の扉の穴に潜む暗部は、それぞれ「光」と「闇」を形象化したものだが、筆者は、発光する卵に闇が潜み、暗がりに隠された「物」に光が当たる可能性を示唆し、マグリットが「光と闇」を対立するものではなく、弁証法的イメージの中で捉えたことを主張した。「光と闇」は、矛盾を含みあい反復運動を繰り返し、その運動が画面にわずかな奥行きを生むこととなった。第4章は、マグリットがこの弁証法的手法を初めて言語化した1938年の自伝的講演「生命線」を取り上げ、この講演の原稿執筆時に制作された《彼岸》との関連性に着目した。講演「生命線」には、少年マグリットが少女と墓穴から地上に出ると画家が墓地の風景を絵に描いていたという挿話が盛り込まれている。本論文は、《彼岸》の陽光で照らされた墓のイメージソースとして、この経験を重視した。死者が眠る墓は光が注ぐ生の場所でもあり、絵画が生まれる場所でもある。マグリットは、「光と闇」の主題を、「生」と「死」を同時に含む込む時空として、絵画に表したのである。

弁証法的手法を試みた1930年代後半は、第二次世界大戦に向かう不安がヨーロッパを覆った時代でもあった。第5章は、そのような状況下でマグリットが「影」を画面から排してもつばら「光」を追求した裸婦像を考察した。マグリットはその追跡において、昼の陽光から夜の月光へと関心を移していく。第6章は、そのような「光」の追求が結実した1940年代の擬似印象派的な作品を考察した。この「太陽の時代」に制作された作例は、マグリットの作品の中で異例なものとして研究が深められてこなかったが、筆者は「光と闇」という主題の展開におけるこれらの作品群の重要性を指摘した。マグリットは、光に満ちた画面に「歎び」を表すモチーフを描く一方で「墓」を挿入したが、その墓も印象派的な色彩と筆致で描くことにより、画面から「影」を排除しつつ、画面の外側にある「闇」を暗示した。筆者は、そのような印象派的絵画を、「精神宇宙」と、光の彼方にある「精神外宇宙」を表現した作例として捉えた。この印象派的絵画を批判したアンドレ・ブルトンに、マグリットはその正当性を訴えたが、1947年にはついに印象派に倣った技法を捨て、再び1920年代の「孤立」の手法を採用するにいたる。第7章は、その過程を追跡した。彼は、「光」（見えるもの）と「闇」（見えないもの）の相互作用により世界の輪郭が与えられていると考え、その有限な世界を「孤立」する対象として捉えた。筆者は、この思考により、マグリットが、印象派的なスタイルを放棄し、輪郭やモデリングによって対象を表す従来のスタイルによる世界の表現へと立ち返ることになったと主張する。

最終章の第8章では、1950年代以降の「弁証法的」手法を論じる。1930年代の「弁証法的」イメージはわずかな奥行きを示したが、50年代以降の作例では、対象は上下に触れあうように組み合わせられ、単色で塗られた背景は奥行きを消している。こうした処理により、マグリットは画面内で「時間」を表現するのではなく、「時間」を画面の外にいる観者の身体へと委ねようとした。この試みは、1949年に昼と夜を上下に並置した《光の帝国》から始まったと考えられる。非現実的な時空間を前にした観者は、自らの身体を「光と闇」で枠取られた世界と対峙させる。モチーフとして頻りに描き入れられるようになった後ろ姿の人物像は、そのような「光と闇」に感応する観者の身体にマグリットの関心が広げられたことを示唆する。マグリットが1930年代に奥行きに表していた空間を画面から消失させて「時間否定」を決定的なものとしたのは、この後向きの男性像＝鑑賞者の身体が光と闇の往還的時間を経験する媒体となったからである。

以上の議論から、本論文は、マグリットが試みた多様な表現が、一貫して「光と闇」の絵画化への希求から

生み出されたものであることを明らかにした。「光と闇」の表現は、「見えるもの」と「見えないもの」、「生」と「死」の問題と絡み合いながら、二項対立のイメージから弁証法的イメージ、光の追求、時間を排した光と闇の平面的並置へと変奏する。マグリットは、1920年代の初期作品において現実的な時間と非現実的な時間、あるいは過去と現在という対置を明暗(光と闇)の空間を対比することによって表し、時間を否定したが、1930年代に「現象法的」イメージを創作するなかで陽光に照らされる墓のモチーフを導入し、光と闇の間の時空間に生と死からなる人間的時間を加えた。1940年代、マグリットは印象派の手法に倣って光を追求し影を排除することによって、世界を輪郭づける「闇」を画面の外の時空間に与えた。1950年代以降、マグリットは「光と闇」を上下に並置して時間を追放し、その「時間」を観者の身体へと委ねたのである。巻末の付録には、1938年の講演録「生命線」の日本語訳を掲載した。

審査の要旨

1 批評

本論文は、ルネ・マグリットが初期から後期にいたるまで、周囲の芸術家との交流や時代状況の影響下で、「光と闇」という主題を絵画に表現することを試みたことを、多くの作例や講演録、書簡、当時の出版物等を詳細に検討し、マグリット作品の豊かなイメージを、「光と闇」の主題がつなぐ大きな連関の中に位置づけ直した点は高く評価できる。先行研究において《光の帝国》を頂点とする議論がなされてきたが、本論文は1938年の講演「生命線」の原稿執筆時に制作された《彼岸》を「光と闇」の表現への試みが集約したものとして捉えた。この議論により、「生命線」がマグリットの画業の中できわめて重要な位置を占めていることが確認された。従来、マグリットはシュルレアリストの画家として論じられてきたが、本論文により、マグリットが一貫して挑んだ「光と闇」の絵画化と、彼がそれを描出するに至った契機とその主題の展開が明らかにされ、マグリット芸術を新しい研究の領野へと導き出した点で画期的な論文といえる。

質疑応答では以下の点について議論された。本論文では「影・陰」が「闇」に回収されて論じられているが、「影・陰」を明示して議論することは、「光と闇」を、「見えるものと見えないもの」、「生と死」、「昼と夜」、「現実と非現実」、「時間と時間否定」、「精神宇宙と精神外宇宙」といった対立項とオーバーラップさせる本論文の独創的な議論にさらなる深まりを与えらる。また、同時代の未来派を含めた芸術家や演劇からの影響、パリ滞在時の活動等の個人的な状況や時代状況をさらに詳細に辿り、マグリット作品が外部とのダイナミックな交流の中から制作されたことを示す必要がある。このような課題は、本論文が新しいマグリット像の提示に挑んだゆえに浮かび上がってきたものであり、本研究の今後のさらなる展開の可能性を示すものであって、本論文の学位請求論文としての価値を貶めるものではない。よって、本論文は、博士論文としての水準に十分に達しているものとして評価する。

2 最終試験

平成30年1月24日、人文社会科学研究所学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。なお、学力の確認は、著者が「人文社会科学研究所論文審査等実施細則」第10条(1)に該当することから免除し、審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士(文学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。